

審査の結果の要旨

氏名 辻 明日香

本論文は、14世紀頃に多く著されたコプト・キリスト教徒による聖人伝の検討を通じて、非ムスリムへの圧迫やイスラームへの改宗が多く生じたとされる時期のエジプト社会を考察したものである。特に、同時代のコプト聖人伝史料を網羅的に検討し、かつ各聖人伝の特徴を比較した上で、この時代に聖人伝が多く著された理由や、著述に関わった人々の社会的背景も丹念に探究している。

第1章では、コプト聖人伝について概説し、東地中海世界における聖人伝叙述の伝統のうちコプト聖人伝を位置づけるとともに、コプト聖人伝の独自性を指摘した。第2章からは具体的に各聖人伝の検討を行ったが、第2章は『ハディード伝』、第3章は『ユハンナー・アッラッバーン伝』を史料に用いて、下エジプト(デルタ)地方のコプト社会のあり方を論じた。その結果、これらの聖人伝を通じて、当時の下エジプトにおけるコプトの信仰生活を明らかにするとともに、聖人伝には各地のキリスト教徒共同体の存在を記録し確認する意図があったのではないかと推論した。

第4章から第6章にかけては、カイロとその周辺で活躍したバルスーマー、アラム、ルワイスの3聖人の聖人伝が分析対象とされた。ここでは、古代シリアの隠修士やビザンツの聖人からの影響が指摘され、また聖人と都市部の住民、あるいはムスリムの王朝政府有力者らとの関わりが検討された。

第7章・第8章では舞台を上エジプトへ移し、ムルクス・アルアントゥーニーとイブラーヒーム・アルファーニーの聖人伝が検討された。両聖人伝は他地域のものとは異なり、当時のコプト社会を揺るがしていた改宗や殉教、再改宗といった信仰保持をめぐる諸問題を主題にしていた。ここでは、イスラーム改宗による信徒の減少への対応策として聖人伝が担った役割についても検討がなされた。

このように本論文は、14世紀頃のコプト聖人伝を総合的に考察した上で、下エジプト、カイロ周辺地域、上エジプトと、地域的背景の差異のうちに読み解こうとしたという点で、従来にないものと高く評価できる。また、聖人伝史料をヨーロッパやエジプトに散在する写本に至るまで博捜し、その情報を丁寧に記述した労作であることも特記すべきであろう。そして、結果として、各聖人伝の特徴を明瞭に浮かび上がらせ、14世紀のエジプト社会全体の変化をコプト側から探った重要な貢献と評価できる。

審査委員会では、史料として聖人伝を使用するに際しての方法論的な課題や、論文冒頭の問題設定がやや曖昧で結論との対応関係がわかりにくいことなどについて指摘があったが、それらは本論文で示された学術的価値を損なうものではない。よって、審査委員会は全員一致で、本論文が博士(文学)の学位授与にふさわしいものと判定した。